

Social Workers

社大OB・OGがつむぐ福祉の絆

ソーシャルワーカーズ

2010年
7月
Vol.1

仕事を持ち
社会での自立
そんな願いを実現する。



子どもや高齢者、地域住民など、
日常的なさまざまな場面で、悩みや
困難を抱えている人を支援するのが、
ソーシャルワーカーの仕事です。
今回は、知的障害を持つ人たちの
支援に取り組む、二人のOB・OG
にお話を聞きました。



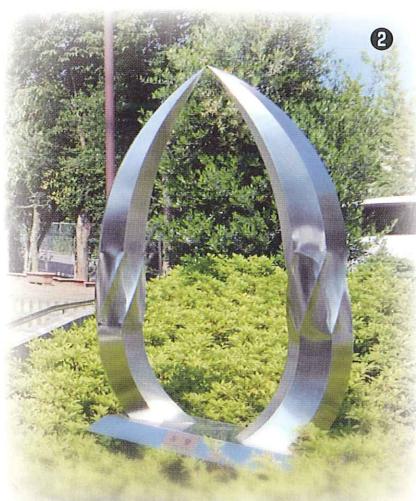
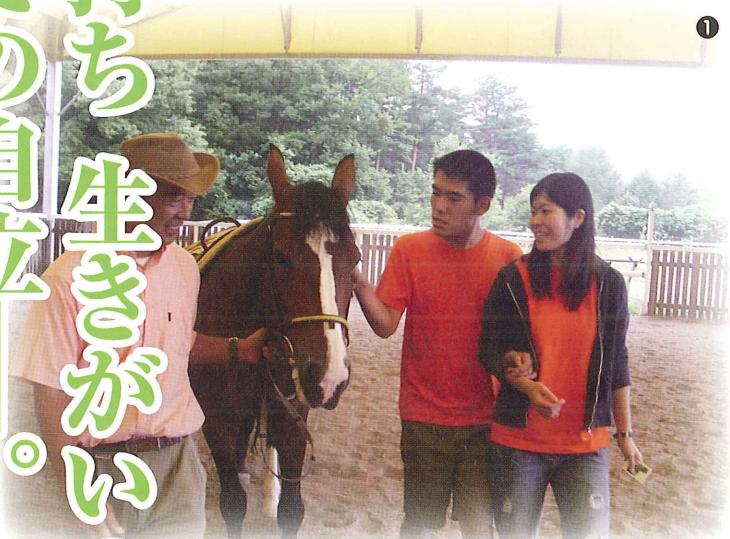
原さおりさん

社会福祉法人「金木星の会」生活支援員
[社会福祉学部・福祉援助学科 2007年3月卒業]



加藤裕二さん

社会福祉法人「オリーブの樹」理事長
[社会福祉学部・児童福祉学科 1979年3月卒業]



- ①原さおりさんが大学時代に取り組んでいたサークル活動、“渋谷なかよしぐる～ぶ”のサマーキャンプのひとこま。夏恒例の乗馬体験です。
- ②加藤裕二さんが情熱を注いだオリーブハウスの誕生20周年を記念して、折谷直信さん（東京在住）から寄付されたモニュメント『友愛』です。
- ③贈り物として人気の高いオリーブハウスのクッキー・アイスクリームは、贈られた人の笑顔を思い浮かべながら作られる、心のこもった商品です。

原さおりさんは、2007年3月に社会福祉学部を卒業。社会福祉士の国家資格を取得し、社会福祉法人金木星の会の生活支援員として働き始めて現在4年目になります。知的障害のある方の生活を支援する施設「金木星の郷」で、朝の起床介助から始まって排泄、食事、散歩、入浴の介助など、利用者の生活全般のサポートをしています。

「卒業論文も、重い知的障害のある高齢の人を対象とする支援をテーマに選んだくらいで、障害を抱える人の生活を全般的にサポートできる施設で働きたいというのが在学時代からの強い希望でした」

いくつか施設を見学した中で、木星の郷に決めたのは、2003年4月開設と歴史が最も新しく、職員も若い人ばかりであるにも関わらず、年配の管理職の方々とともに強い信頼関係で結ばれていると感じること

希望通りの施設就職を実現 利用者の生活全般をサポート

原さおりさんは、2007年3月に社会福祉学部を卒業。社会福祉士の国家資格を取得し、社会福祉法人



[はら・さおり]1984年生まれ。2007年3月、福祉援助学科卒業。社会福祉士。現在の勤務先は、「きちんと休暇を取れて、夕食も用意してくれる」ため、大満足している。高校生には、「福祉系の大学だと、卒業後も共通の仕事の悩みを打ち明けたり、相談できる友だちができやすいと思う。これは大きな財産です」とメッセージを送ってくれました。

ができたからでした。そんな思い描いた通りの仕事に就いた原さんですが、大学に入學してサークル活動を始めるまでは、障害のある人たちときちんと向き合つたことがありませんでした。

「日本社会事業大学を選んだ理由は、医療ソーシャルワーカーだった母の勤めがあつたから。初めから福祉に強い関心があつたわけではありませんでしたが、在学中にサークルに入ってから障害者の方々への支援活動にどっぷりはまってしまいました」

影響を受けたサークル活動 仲間は今でも良き相談相手

原さんを現在の仕事に導いたともいえるそのサークルは、「渋谷なかよしぐるーふ」という、日本社会事業大学の卒業生が運営する団体。金木星の郷に就職したのも、そのサークルの先輩から見学に誘われたのがきっかけでした。

「サークルでは、季節にちなんだお昼ご飯をみんなで作ったり、乗馬をしたりブールに入つて楽しむサマーキャンプやナイトハイクなど、日曜日だけ学生が企画運営を任されるプログラムがあり、私は1年生から所属して、毎回4時間、そのプログラムに仲間と一緒にでいました」

知的障害者への関心が高まつたことはもちろん、いかにして活動をより充実させていくか、同世代の仲間たちとサークルで幾度となく語り合つたことがその後の人生に大きな影響を与えたと振り返ります。

壁にぶつかつたときも、大学時代

が多々あります。けれど、「これが現実だから」と冷めていたら何も変わりません」

実際、実習生や新しい職員が別の目線で見てくれば、現実が発見があり、また同時に自分の意識も変わることが分かり、最近では、これまでの経験も尊重しつつ新しいやり方にも取り組んでいけたらと思うようになつたと語ります。

「障害のある方が住みやすいと思う場所で、少しでも快適な生活ができるようなサポートをこれからも続けていきたい」と話す原さんは、将来は介護福祉士の国家資格の取得も考えています。



金木星の郷の利用者の手作り作品に、スタッフが手を加えて仕上げたバッグなど。

常に前向きな姿勢を大切に 将来の夢に向かつて

金木星の郷の職場環境や職員数なら、「現状はこれがベスト」と納得しながらも、「もっと良くしていきたい」という積極的な考え方を忘れない原さん。「働き始めると、学生時代に描いていた理想と現実の違いを痛感すること」が、原さんは目を輝かせて、ソーシャルワーカーの仕事の魅力を語ってくれました。

「『ヨニケーション』を取ることが難しい障害のある方の思いをなかなか汲み取つてあげることができずに悩むことも少なくありませんが、だからこそ、思いをかなえてあげることができたときの喜びは大きいです」と、原さんは目を輝かせて、ソーシャルワーカーの仕事の魅力を語ってくれました。



原さんのある一日（※実際の勤務では早番・遅番があります）

●朝食（7:30～8:30、早番業務のスタート）

今日はスペシャルメニューのピザパンの日！ フルーツのヨーグルトかけもあり、「テンションも上がり気味です」

●作業（9:30～11:30）

月に一度はお誕生日会も開きます。「メッセージカードとケーキでみんなうれしそうです」

●昼食（12:00～13:00）

お昼の準備は大変。でも、入所者さんも手伝ってくれるので、「大助かりです」

●外出（16:00～17:00）

担当の利用者さんと月に一度お出かけすることもあります。「うれしそうな表情を見ると私も元気になれます」

●入浴（17:00～18:00）

みんなは大のお風呂好き。「ついつい長湯をしてしまう人もいます」

●夕食（18:00～19:00）

食事が進まない人がいて、おしゃべりをしたり歌を歌ったりして「気分を上げていきます」

●フリータイム（19:00～21:30）

入所者さんと洗濯物をたたみます。テレビを見ながらゆっくりとおしゃべりができる「憩いのひと時です」

●就寝（21:30～、遅番勤務の場合）

足がむくんでいる人のマッサージ。「気持ちが良かったのか、そのままお休みになりました」



障害のある仲間たちと実現した共同生活の新しい形 楽しくてやりがいにあふれた30年間。 福祉の道こそ自分の天職 加藤裕二さん

(社会福祉法人「オリーブの樹」理事長)

子どもたちの福祉を志した大学時代
共同生活所の仲間の姿に感動

社会福祉法人「オリーブの樹」の
理事長 加藤裕二さんは、現在千葉県
で、複数のグループホームやヘルパー
ステーション、知的な障害を持つ人た
ちが働く施設である障害者就労支援施
設などを運営しています。「とにかく
忙しい毎日ですが、最近はすっかり慣
れました」と笑う加藤さんが、知的障
害のある方を支援する福祉の世界に
入ったのは、日本社会事業大学学生課
の紹介を受けたのがきっかけでした。

「1974年に大学に入学して、卒業したのが1979年。ですから、早いものでもう30年もこの仕事を続
けています」

子ども好きな加藤さんが学生時代
にめざしたのは、保育士。当時、男
性の保育職志望者に対する周囲の反
応は冷たく、その希望は叶いません
でした。しかし、大学の紹介がきっ
かけで障害を持つ子どもたちを支援
する施設に就職することになります
た。学生時代に難病を抱えた障害者
の解放運動や自立問題に取り組んで
いた加藤さんは、就職した障害児施
設の近くに偶然、進行性の筋ジスト
ロフィーや脳性マヒなどの障害者と
健常者が共同生活をしている寮があ
ることを知り訪ねていきました。

「職員として障害児を支援する施設
で働く一方、その共同生活寮にもボ
ランティアとして参加するという二
重生活。「本当にやりがいのある毎日
を送ることができました」と、加藤
さんは振り返ります。特に、寮では、
安定した施設職員の仕事を辞め、
収入も先行きも不安定な生活に足を
踏み入れた加藤さんに、周りはとても
も批判的だったといいます。障害を
持つ仲間たちの家族に大反対され、
時には警察に訴えられそうになつた
こともあります。

「自分たちの力で生活できることを
証明するのに必死でした。4ヶ月く
らい経った頃ですね、ようやく周囲
の理解が得られ始めたのは。それに、
医師や看護師などが医療機関との
コーディネートを図ってくれたのも、
とてもうれしかったです」

しかし、日々の生活は経済的に大
変厳しいものでした。加藤さんは、ガ
レージセールやバザーなどを開催した
り、難病患者記録映画の上映会を各地
の学校などで開催したりして、共同
生活所の運営費を稼いでいました。そ
んな加藤さんの噂を聞きつけて、養護

子どもの福祉を志した大学時代 共同生活所の仲間の姿に感動

【かとう・ゆうじ】1954年生まれ。1979年3月、社会福祉学部・児童福祉学科卒業。同年保育士資格取得。“福祉の仕事はきつい、きたない、給料が安い”のではないかと思う高校生に対して、「そんなことは決してありません。楽しく働き、充実感たっぷりの施設職員たちを見て下さい」と、大ベテランのひと言で安心させてくれました。

オリーブハウスのあゆみ

- 1984年 千葉市の轟町で、現社会福祉法人「オリーブの樹」の理事長である加藤裕二さんご夫妻と数人のボランティアが、福祉作業所オリーブハウスを開所。
- 1986年 ボランティアの協力のもと、「クッキー・パウンドケーキ」の製造・販売を開始。
- 1996年 ワークホームが3カ所に、また、利用者・職員が24人に増える。社会福祉法人設立及び、授産施設建設準備開始。これに伴い、募金活動、土地購入法人認可手続き着手。
- 2001年 社会福祉法人「オリーブの樹」を設立(4月)。
- 2002年 小規模通所授産施設「ファーストオリーブ」誕生(11月)。
- 2004年 グループホーム、「鉄腕アトホーム」オープン(1月)。グループホーム「ミニーナ」オープン(4月)。ヘルパーステーション「おきらく」オープン(5月)。
- 2005年 グループホーム「フラップ」オープン(3月)。オリーブハウス長沼分場「はづらつ道場」を開所(7月)。
- 2009年 就労支援施設「花まんま」開所(4月)。



苦しくても楽しい日々に大満足 念願のオリーブハウスを設立

障害を持つ彼らが地域における自立生活に挑戦するというたくましさに触れることができ、大変感動を感じたとのことです。

そのことを地元の千葉市に戻つて同じ障害を抱えた入院中の仲間たちに報告すると、自分たちにもできないかという意見が異口同音に出できました。

「そんな声に後押しされて、病院の中だけで一生を終わるたくないという筋ジストロフィーの障害者と一緒に、アパートを借りて共同生活を始めたことになりました」

学校を卒業して、働く場を求めている障害者たちがさらに集まるようになつたに、福祉作業所であるオリーブハウスを設立することになったのです。

「1984年のことでした。これが現在のオリーブハウスの母体です」

よく聞かれるのが、オリーブハウスの名前がどこから来たのかということ。加藤さんによれば、ある女性のボランティアが、「友愛」や「平和」、「人と人が仲良くなる」という意味を持つオリーブが最もふさわしいのではないかとアドバイスしてくれたのがきっかけになつたのだといいます。

理解された障害者の手作りクッキー

福祉ショップ、相談事業へと発展

開所して数年後、オリーブハウスの運営がうまくいかない様子を見かねたボランティアスタッフが、障害者が焼き上げるクッキーの製造はどうかと、アイデアを提案してくれました。

「当時持っていたお金すべて注ぎ込んでクッキー製造の作業室を作りました。1986年の9月、小さなオープンからじんわり焼けたクッキーが出てきた時の感動は決して忘れることができません」

障害者の手作りクッキーが広く受け入れられたことをきっかけに、オリーブハウスは、大きく発展。2000年には社会福祉法人化を遂

げ、現在は、法人グループ全体で職業指導員、生活支援員など、30人の職員と約90人の障害者とともに歩む施設へと成長しました。

新鮮な牛乳を主原料とした質の良いアイスクリームの製造を行っています。厳格な衛生管理の中、規則正しい作業態度で学びます。



持つ人たちと一緒に頑張るという目標を実現できたことの方がうれしいです」

加藤さんは、これまでを振り返りながら、豪快に笑い飛ばします。そして、苦しい時代を乗り切り、夢を実現することができた大きな理由の一つを、大学時代に築いた多くの人たちとの絆——日本社会事業大学のチカラだと力説してくれました。

「施設の建設資金が不足していると知った友人が寄附を申し出してくれたり、弱気になつてはいる僕を大学時代の先生方が物心両面で励ましてくれたり、精神的に辛い時期を仲間や恩師が支えてくれたことに感謝しています」

ソーシャルワークというのは、問題を抱えているすべての人の周りに存在すべきものです。社会的な制度の谷間や埋め切れない部分、ひずみなどをいかに拾い上げていくかが、ソーシャルワーカーの役割なのだと、加藤さんは教えてくれました。



ニュース & トピックス

福祉系大学の就職率

四年制大学で社会福祉を学んだ卒業生は、どのような分野に就職しているのでしょうか。ここでは、2009年10月、社団法人日本社会福祉教育学校連盟が発表した「社会福祉系学部・学科、大学院卒業生の進路等調査報告書」からその進路の内訳を見ていくことにしましょう。

そこには、大学で社会福祉を学んでも10人のうち6~7人は福祉分野に就職していないという現実があります。別の見方をすれば、短大・専門の卒業生は専門への志向が強く、それと比べると大学の卒業生は、専門職への志向にバラツキがあるところとが言えるでしょう。

2010年3月、財團法人社会福祉振興・試験センターより「第22回社会福祉士国家試験学校別合格率」が発表されました。それによれば、2~5の四年制大学等から2千9千人強が受験し、合格率平均は24.5%でした。

受験生の数は、数百人が国家試験に挑戦している今から、1人のみの大学まで、さまざまですが、100人を超える合格者がいた大学は、ほとんどが合格率平均を上回っています。一方合格者が50人未満の大学で、合格率平均を上回った大学はありませんでした。

このじで社会福祉学科を置く短期大学以下、短大と専門学校以下、専門の様子を見てみましょう。短大の上位3位は、①「福祉・医療系」1207人(50.8%)、②「一般企業社員」453人(19.1%)、③「進学」353人(14.9%)です。一方、専門学校は、①「福祉・医療系」2404人(80.6%)、②「一般企業社員」160人(5.4%)、③「就職を希望しない」102人(3.4%)となっていました。

うことです。しかし、それぞれの割合は大きな違いがあり、大学の約4割に対応して、専門は約2割以上。短大はその中間です。その逆に、「一般企業社員」は大学35%で、専門は約5%となりの開きがあります。また、「公務員福祉職以外(教員除く)」では、大学は約3%と、短大・4%、専門0.6%よりも高い数値を示しています。

そこには、大学で社会福祉を学んでも10人のうち6~7人は福祉分野に就職していないという現実があります。別の見方をすれば、短大・専門の卒業生は専門への志向が強く、それと比べると大学の卒業生は、専門職への志向にバラツキがあるところとが言えるでしょう。

2010年3月、財團法人社会福祉振興・試験センターより「第22回社会福祉士国家試験学校別合格率」が発表されました。それによれば、2~5の四年制大学等から2千9千人強が受験し、合格率平均は24.5%でした。

受験生の数は、数百人が国家試験に挑戦している今から、1人のみの大学まで、さまざまですが、100人を超える合格者がいた大学は、ほとんどが合格率平均を上回っています。一方合格者が50人未満の大学で、合格率平均を上回った大学はありませんでした。

このことは、同じ社会福祉が学べる大学でも、福祉専門職である社会福祉士を目指し、ソーシャルワーカーの育成に力を入れる「福祉系大学」と、福祉関連以外への進路や一般企業への就職に強い大学とに、傾向が一分していることを示しています。

ちなみに、日本社会事業大学の卒業生は、毎年約6割が国家試験に合格し、ほぼ9割が福祉関連分野への就職を果たしています。